

花の浮草

石川達三

新潮社版

花の浮草

昭和四十年八月二十三日 印刷
昭和四十年八月二十八日 発行

定価 四二〇円

著者 石川 達三

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(26)二一一番(大代)
振替東京八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替いたします)

花
の
浮
草

侘ぬれば身を浮草の根を絶えて

誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

小野小町

ひとりの女の生涯を主題にした小説は無数にある。女の伝記も無数に書かれている。しかし恐らくは永遠に、女というものが語りつくされ書き尽されることは無いだろう。

女は神秘でもなければ不可思議でもない。むしろ或る場合には単純で、幼稚でさえもある。本質的に言って、女には悪意はない。ほとんどすべての女性は、善良であると言ってもいい。しかも女はきわめて多くの場合、男たちによって誤解され、悪評され、または軽蔑される。それは女の罪ではなくて、男の側の罪であることが多いのだ。男たちは女性を理解しようとして努力する。その努力は真剣で、正直だ。しかしさらに付け加えて言うならば、彼等は（筋道を立てて）理解しようとする。男性というものは、筋道が立たないことは理解できないし、筋道を通らないことを軽蔑するといふかたくなな性癖をもっている。……ところが不幸にして女性は、筋道が通らないように出来ている。直感的であり、または飛躍的である。天性そういう風に生れ

ついているのだ。したがって女性は、男に（理解される）ように出来ているのではなくて、ただ愛されるように出来ている。たといそれが誤解であっていいから、愛されることを望んでいる。そして更に不幸なことには、彼女等と与えられるほとんどすべての愛が、誤解の上に成り立っているのだ。誤解だけが男の愛を支えている。……

したがって女を愛する男は、或る時期が過ぎると、自分の誤解に気がつく。そして興味をうしない、女への愛情を喪失する。それは女の罪ではない。男たちは勝手に誤解し、勝手に興ざめしているのだ。彼等は愛する女性の上に自分勝手な虹をえがき、自分勝手な女神像を彫刻し、さて後になってから、現実の女が女神像とは別のものであることに気がついて、女から離れて行く。結局彼に必要なものは理想の女神像であり、現実の女は男性のロマンティズムに一つの手がかりを与えてやっただけであって、彼女自身はただの被害者にすぎないものとなる。それは女性の悲劇の、永遠につづく一つの型である。

ここに、一つの女神像がある。（一つ……）というのは不正確であるかも知れない。七つか、十か、十二か……たくさんの女神像がある、と言った方がいい。それは即ち七人か十人か十二人かの男たちが描き出した女神像であって、その原型、そのモデルとなった者は或るひとりの女である。彼女は五十年あまりを生きて、一つの生涯を終った

のであるが、その意味から言えば彼女は七つか十か十二かの人生を生きた……ということも出来るかも知れない。少なくともその何人かの男たちの心のなかに、或る時期に於て、彼女は自分の彫像をはっきりと刻み込んだ。それがたとい男たちの誤解であろうと何であらうと、彼女は自分の存在を男たちの魂の中に刻みつけてしまった。しかしその事は、彼女の生涯の幸不幸とは全く別のことであった。

1

その家系から言えば伊沢一族は武家の流れであった。武士の血筋というものが大正・昭和の時代になってもまだ、その子孫の中で生き残っているものかどうか。血筋よりもむしろ時代の一般的風潮の方が、より強く個人の性格を左右して行く。明治時代の一般的風潮のなかには、文明開化を謳歌するものと、封建的な感情を固執するものと、二つの流れがあった。伊沢弥三郎は後者であった。明治の末になってもまだ彼は、徳川時代の武士たちと同じような、こつこつした単純な感情しか持てない男だった。その単純さは息子の角太郎に遺伝し、孫娘の春江にまで遺伝したよう

であった。そしてその事が、伊沢春江の生涯に或る決定的な力となって働きかけて行くのだ。それが彼女にあたえられた（宿命）であった。宿命は、彼女自身の責任ではない。先祖から与えられたもの、あるいは神から与えられたものだった。けれども春江にあっては、祖父弥三郎の単純さが男性的な決断力をもたっていたのに反して、彼女の単純さは女らしい迷いと愚かさとを伴っていた。

弥三郎は医者であった。（深くくぼんだ眼、峻厳な高い鼻、白い顎ひげをたくわえ、どこかに爽やかな昔の藩士のおもかげがそよいでいた）……というような、まことに医者らしくもない医者であった。京都から北へ、少しはなれた小さな町の、赤土の崖の上に広いやしきを構え、崖にのぞんで（伊沢医院）という地味な看板を出していた。

この剛直な医者は、息子の角太郎が小学校の教師になったとき、

「ふん、教師か」と言って笑った。

彼は息子が官職につくことを望んでいたのだった。官職につくことはすなわち天皇陛下の直臣になることであると弥三郎は信じていた。自分は民間人でありながら、官尊民卑の思想にかたまつた男だった。患者の来ない閑な時には、土蔵の中から幾振りの日本刀をとり出して、丁子油をぬり打ち粉を打ち、つくづく眺めて楽しんでた。日本刀が彼にとって、（古き良き時代）の象徴であるらし

った。

角太郎は大阪郊外の学校につとめていたが、縁あって山岸市子と結婚の約束をした。市子は大阪の娼家の娘であった。それを知ると弥三郎は息子にむかって嚴肅に申しわたした。

「そのような者を伊沢の家に入れることは相成らん。血がけがれる。私は断じてゆるさんぞ」

角太郎はこの父と争う勇氣はなかった。彼自身もまた娼家の娘と結婚するのが悪いということを重ね知っていた。そのときは父もその息子も、娼家の娘と娼婦とを混同してゐるようなところがあった。娼家の娘はただ娼家をいとなむ父母の子として産れただけのことで、彼女自身の道徳性や倫理性とは何の関係もない。しかし弥三郎はその娘までもけがれて居ると信じ、角太郎もまたそういう父の意見に抵抗し得ない程度には、氣が引けるものを感じていた。

けれども角太郎は、父の許しが得られぬままで市子と同棲した。やがて市子は長女春江を産んだ。明治三十八年の二月、日露戦争の第二年目、旅順開城の直後、奉天会戦の直前であった。

春江の母が娼家の娘であったということが、春江の性格に、その倫理性や道徳性に、影響するものが有ったか無かったか。……それを確實に証明する方法は無い。市子は娼家の娘ではあったが、娼家にうまれたという事は彼女の責

任ではないし、その事によって直ちに市子の倫理性を批判することは出来ない。しかし市子の両親は、みずからその職業を選んで娼家を経営した人たちであった。したがって、少なくとも市子の両親には高い倫理性や道徳性が無かったということは否定し得ない。そして、性格の遺伝や道徳性の遺伝ということが確實なものであるならば、市子もまたその両親の血を享け性質を受け継いで居たであろうし、その娘の春江が母と、母方の祖父母からの遺伝を受けていかなかったという証明も成り立たない。……春江はそのようにして、祖父伊沢弥三郎の剛直にして單純な封建性と、祖父よりは少しばかり氣の弱い、しかし娼家の娘と結婚するような一種の崩れ方を示している父角太郎の性格と、娼樓をいとなんでいた母方の祖父母の血とを享けて、彼女自身が後に記しているところによると、（ひよわな小猿のような娘）として産れて来たのであった。

母市子はその後つぎつぎと、次女をうみ長男をうんだ。角太郎は薄給であったから生活に窮し、長女春江を老父に託した。弥三郎は老妻と二人きりの淋しい生活であったから、角太郎の結婚には反対であり、その妻にはまだ対面も許していなかったが、喜んで春江を引きとることにしたのだった。それは老人の身勝手というべきものであったが、そのような（身勝手）が、孫娘春江の生涯の、至るところにあらわれて来て、後に、彼女を知る程の人たちの眼を見

張らせたものであった。

春江は祖父母のもとで極端に甘やかされて育った。この甘やかされた幾年かの生活が、彼女にとっては抜き難い後天的な性格となつて、終生彼女の運命にふかい影響をあたえることになった。彼女にそのことによって謂わば一種の（出来そこない）になつてしまつた。彼女は大人になつてからも、中年女になつた後にさへも、人から甘やかされることが自分に与えられた当然の権利のように思つていた。甘やかされる自分以外の自分というものを、想像することが出来なかつた。彼女は自分の人生に甘え、社会に甘え、男たちに甘えた。そのことで春江はその生涯に於て、どれほど大きな得をしたか知れないが、同時にその事のために決定的な不幸を招くことにもなつた。

甘やかされたことの影響はそれだけではない。彼女は一種驕慢な性格を身につけていた。また更に、甘やかされることに馴れた、ぬけぬけとした図太さを持っていた。他人はすべて自分を甘やかしてくれるものと信じているところから来た人の良さや、ひとを信じて疑わないようなところもあつた。図太さは、自分では全く理解できないものの、他人の眼から見た時だけの図太さであつた。……これらの事を根柢に置かなければ、成人してから後の伊沢春江の生き方は、理解することが出来ないようなものであつた。

明治四十五年七月三十日、明治天皇崩御。

そのとき伊沢弥三郎はその剛直さとその封建的な單純さとから、殉死の決心をした。多分彼は六十四五歳であり、その当時としてはかなり長命な方であつた。いわゆる（もはや生きて甲斐なき命……）であつた。彼は土蔵のなかから愛蔵の日本刀をとり出し、庭はずれの崖の上にむしろを敷き、その上に端坐して東方を遙拝した。彼の妻も殉死に同意していたものか、大きな仏壇の前でしきりに説経してゐた。このとき弥三郎は孫娘春江を呼び寄せて、死の道連れにしようとした。

春江の後年の手記によれば弥三郎は、かちりと音をたてて刀の小柄をはずし、
「とうてい七歳の学齡までは育たぬ、ひよわな孫じゃ。残しては行かれぬ」

と言つたことになっているが、七歳に満たない春江が祖父のこんな言葉を記憶していたかどうかは疑問がある。また、明治三十八年二月の生れということに間違いが無ければ、早生れの春江は前の年の四月から小学生になつてゐた筈である。したがつてこのあたりの春江の記述には信頼をおき難い。祖父が端坐してゐたむしろのまわりには石竹の赤い花むらが咲きひろがつて居り、瘦せた小猿のような孫娘は祖父のいかめしげな振舞をいぶかしんで、呆んやり突つ立っていた。するとたちまち中年の下男が駆け寄つて祖父を突き倒し、日本刀を取り上げて崖下に投げてしまつ

た。弥三郎はだらしなく石竹の花の中に倒れ、下男はふわりと春江を抱きあげて、赤土の坂道を崖の下まで走った。

……

春江の手記にはこのように美しく書かれているが、この中にはかなりの装飾があるようである。これは自伝というよりはもっと創作的であり、或いは記憶のうすれた所に自由に加えたい彼女の幻想のようでもある。

小学校へ行くようになってから、彼女は生徒たちに苛められる子供だった。男の子も女の子も春江を憎んで、理由もなく彼女をいじめた。しかし子供たちにとってそれは（理由のない）ことではなかったのだ。伊沢春江という少女は何かしら眼ざわりな、子供たちにとって癪にさわる、異質的なものを持った、いやな子供であったのだ。彼女は甘やかされて育ったための図々しさをもち、驕慢さをもち、きれいな着物を着て、ひどく取り澄ましていて、髪に赤いリボンをつけたりして、たびたび男の先生の手にとぶら下って、まるで成人した女のような一種の色気があって、すること為すことすべてが子供たちには眼ざわりでならなかった。だから学校の行き帰りに春江はきつと苛められて泣いた。いじめる男の子の中には女の子もまじっていて、はやし立てたり石を投げたりした。

しかし彼女は自分がなぜ苛められるか、それを理解し得なかった。のみならず、いじめられる自分に一種の優越感

さえも味わっていたかも知れない。他人にとって眼ざわりであり、何かしら異質な印象をあたえることは、終生変らない彼女の本質的な性格であった。彼女をいじめた子供たちは、彼女から一種の魅力を感じていたのだ。その魅力が子供の幼稚な嫉妬心を誘発し、反撥を感じさせていた。けれども春江は自分の持つ魅力を自分で感じて居り、本能的にその魅力を大切に守ろうとしていた。したがって彼女はいつまで経っても苛められる生徒であった。毎日のように苛められ泣かされながら、いじめられる自分に一種の誇りを持ち、逆に自分の驕慢さを高めて行った。

その頃、春江の両親は台湾へ行っていた。台湾での教師の職は内地よりも高給であった為だった。彼女がはじめて両親に会った記憶は、大正のはじめ頃、父が風土病の治療のために母を連れて帰郷した時だった。このとき母ははじめて許されて祖父弥三郎に面接した。弥三郎が市子に会う気になったのは、もはや彼が老衰していて、頑固な気象もおとろえて来たためだった。春江は母の美貌におどろいて、しげしげと眺めていた記憶をもっている。写真で知っている父がはじめて眼の前にあらわれた時、彼女はかしこまって体を突っ張らしていた。あくる朝、この小猿のような娘は、まだ寝ている父の夜具の裾に坐って、父という男の姿をつくづくと眺めていた。夜具からはみ出した父の足の裏が黄色くきたなくて、あまり大きいので、彼女は気味が悪

くたった。……この父と春江とは、生涯ついに本当の打ちとけた親子にはなり得なかった。春江が父にとって厄介者であるか、父が春江にとって厄介者であるか、どっちかだった。そして母との間にも深い愛情をもつことが出来なかった。結局誰よりも深く、無条件な愛情をもって彼女を遇してくれたのは、祖父弥三郎だけであった。

祖父はただ一方的に彼女を愛した。愛することがこの老人の晩年における唯一の喜びだった。春江はまたその愛情を受けるだけの立場だった。愛されることが当然であり、自分の特権であるかのような関係であった。彼女にそういう特権がある筈はないのだが、彼女はその特権を疑わず、祖父もそういう在り方を当然のように思っていた。

父と母とが春江を連れて台湾に帰ることになると、春江は泣きわめいて反抗した。両親のそばに居るよりも祖父の家に居る方が自分にとって都合が良いことを、このわがままな娘はちゃんと知っていた。父も母も好きではなかった。この時から既に彼女は実父母に絶望していたのだ。

角太郎と市子とは、聞きわけのない長女をなだめすかして大阪まで連れて出たが、この娘を連れて台湾まで行く自信を失ってしまった。そのうえ春江は小猿のようにしなびてひよわな娘だった。南台湾の苛烈な風土のなかで果して無事に育てられるかどうか。それも心配だった。そこで市子は、大阪にいる彼女の妹に春江をあずけて行くことに話

をきめた。つまり市子は、春江の母としての権利と義務とを抛棄したかたちだった。また春江の方はこのときはつきりと、母を拒否したのだった。母よりもむしろ始めて見る叔母の方を彼女は選んだのだ。それは子供の叡知の一種でもあった。この叔母はほとんど他人も同様である。他人であることの方が、愛情のつながりを持たない実母よりも、ずっと親しみ易いものであることを、この子は知っていた。「あんだ、春江さんですのんか。えらい猿みたいな小ちな子やな。はよう、こっち来なはれ」と初対面の叔母は言った。

この叔母のもとで、彼女は三年間そだてられ、紡績工場の太い煙突の下で、古い小学校に通った。いつも彼女は（張り板から剥がしたばかりの布みたいに、びんと突っ張った、得意な姿勢をしていて、鈍感な優等生……）であった。

叔母は北浜の金持の息子の、妾だった。春江はこの叔母に連れられて、まいにち近所の銭湯にかよった。叔母の裸身はぼってりと白くて、胴長で、眼の大きな美人であった。春江はいつもこの叔母の裸身に見とれていた。こういう若い、成熟した女の裸を見たのはこの時が始めてであった。そして叔母の肉体に強いあこがれを持った。それは春江のなかで育ちつつある女性の、手近にある理想像であった。彼女は本能的に、そのような女のからだが何のために

備えられ、何のために成熟しているかを知っていた。彼女は叔母の裸身がもっている強い魅力をも、自分も是非とも持たなくてはならないと感じていた。自分がそうした魅力を持ち得るまでにはまだ年月が必要である。彼女はその年月を飛び越えて、早く叔母のような大人になりたいと願っていた。

娼家の娘であつて、今は金もちの息子の子になつてゐる女に、長女春江をあずけたままで台湾へ行つてしまつたという事は、教育者である父の角太郎の怠惰、乃至は失敗であつた。それくらいならば春江を祖父弥三郎の手もとに置いた方がよかつたのだ。彼は後になつてから春江の（不良性）に悩まされるのであるが、それは父がみずから種を蒔いたものであつた。春江は大阪の小学生当時、決して不良生徒ではなくて、クラスの優等生であつた。しかし彼女の中にひそかに不良性が育てられつゝあつたことを、誰も知らなかつた。彼女は祖父弥三郎の剛直さと謹厳さとを少しも受け継いで来なかつた。それには祖父とのあいだに年齢の開きがあり過ぎたし、弥三郎はただこの小娘を溺愛しただけであつた。彼女が祖父から受け継いだものがあつたにしても、それは母方から受けた性格と、叔母のもとで暮した三年間の生活環境とで、すべて拭い取られてしまつてゐた。

彼女は叔母のもとにしげしげと通つて来る（旦那）の存

在を知つた。その男がやつて来た時の叔母の不思議な振舞を、息を詰めて凝視していた。彼女は其の時から男女関係の秘密を知り、またその事に強い好奇心をもち、叔母の行動に対して敏感になつた。道徳性が發育しないうちに、彼女は男女関係の魅力だけを知らされたのだった。後になつてから道徳性が発達して来ても、その方は立ち遅れになつてゐた。……このことがやがて彼女の後半生を支配することになつた。彼女は大人になつてから後にも、一面に於て優等生であり、他の一面に於て不良生であつた。

三年たつて春江が小学校を終ると、台湾から母が迎えに出てきた。母市子が、この子を妹にあずけつ放しにしてゐた事に責任を感じたのか、叔母が大きくなつた春江を邪魔にして引き取ることを求めたのか。その間の事情は解らない。四月のはじめ、二人は神戸から船に乗つた。台湾の南端にちかい父母の家まで行くのは、一週間もかかるような長い旅であつた。

春江にとつては、これから始めて両親といふしよに暮す（水入らず）の生活がはじまるのだった。したがつて、いま改めてまた父と母とに大きな期待をもつような氣持になつてゐた。彼女は一面においては極めて驕慢な、機嫌の変わりやすい娘であつたが、他面では祖父に甘やかされて育つたお人好しな、人を信じて疑わないようなところもあつた。彼女は船旅の始めのうちは、母に親しみ母に甘えかか

るような気分であつた。いまさらながらこの母に肉親を感じ、大阪の叔母とは違った打ちとけたものをさえも感じていた。けれどもこの母は彼女の期待を裏切るような女だつた。母は春江をつめたい流し眼で見ながら、

「何だろうね、この子は……」と、きつい言い方をした。

「気取つてばかりいて、そのくせ神経質で、お父さんに似た変な子だよ、ほんとに……」

春江はせつかくすがりついた座みの親から、突き放されたような氣持にさせられた。すると彼女はますます驕慢な、氣取つた姿勢になり、ものも言わずに母を睨んでいた。

市子は母としての資質を全く欠いた女だつた。十年以上も手放していた娘を引きとる場合の、二人のあいだの繊細な感情のはたらきなどを一切理解することの出来ない、がさつで低俗な女だつた。それでもまだ春江は（母）という名にあこがれて、当然あたえられるであろう愛情を期待して、この母にすがりつこうとしていた。とにかく今は母を離れては生きる術をもたない孤独な身の上だつた。しかし船旅の四日目になって、彼女は母から決定的な打撃を受けることになった。

彼女は夜の夜、船室の中で、母の多量の出血を見てしまった。それは普通の出血にすぎなかったが、女の生理の経験をもたない春江は真蒼になって、慄えあがるほど驚い

た。そのとき市子は変に艶のない白い顔をして、叱りつけるような口調で、

「子供が親を大切に思わないから、親がこんなことになるんだよ」と言つた。

春江はこういう母の姿に直面して、足もとの土が崩れ落ちるような絶望を感じた。すくなくともその日まで母に対して持っていた愛情、持とうと努力していた愛情、尊敬……そういう一切のものが、あとかたも無く瓦解してしまつた。この恥の衝撃と絶望感とで彼女は、（全身の半分が黒痣になるかと思われる程……）の苦惱を味わつた。そして、この時の母への怒り、あるいは女というものに対する怒りは、終生彼女の心から抜けなかった。彼女は自分が女でありながら、女である自分にいつも腹を立てていた。その矛盾した心が、彼女の人生を破綻にみちびいて行つたようであつた。

市子はそういう無神経な、そういうだらしの無い女だつた。祖父弥三郎が断乎として市子を拒み、（伊沢の家系の血がけがれる……）と言つたことは、當つていた。彼女は娼妓を経営していた両親の娘であり、子供の頃から十数人のかかえ娼妓の生活を見馴れていた。そして娼妓たちのだらしない日常生活を普通の女の生活のようにしか見てはいなかった。市子がそういう下等な女に育てられてしまつたのは両親の責任であり、その両親の怠惰が、いま孫娘春江

の大きな不幸となつて、そのかぼそい肩に降りかかった米たのだった。

しかしながら母市子に強烈な反撥を感じていた春江自身も、やはり母の血を享けた女であることは、拒み得ない現実であつた。彼女はこの時にはまだ、自分はこの母とは全く違う清潔な女であることを自負していた。彼女の誇り高い心は、こういう母の在り方を許し得なかつた。けれども母の血液は春江の中でやはり生きていた。彼女にも母によく似た欠点がひそんでいた。のみならず、この日から三十年以上も経つた後に、彼女自身が外出先で母と同じ失敗を仕出かして、女友達の前で羞恥にふるえるような思いを味わねばならなかつた。……

台湾における父の家は、二百年もの昔に清朝政府が築城した、その古い荒廢した城のそばの小さな町にあつた。台湾人が住民の大部分で、日本人といつては教師が二人、巡查が三人、代書がひとり、それから床屋と医者かひとりずつ住んでゐるばかりだつた。烈日の下で、豚と水牛とのけもの臭さがむんむんしているような部落だつた。父角太郎はそこで学校の教師をしながら、神主をも兼ねてゐた。小さなさびれた駅があり、プラットフォームは吹きさらしで、砂利が敷いてあつた。春江はこの小さな汽車に乗つて高雄の街の女学校にかよつた。

彼女の父角太郎は形式主義者というような男だつた。祖

父弥三郎の封建的な形式主義がこの父にそっくり遺伝されてゐた。角太郎の場合にはそれが神官という職によつて、さらに形式化されてゐた。形式的な職業行為が、彼の家庭生活にそのまま持ちこまれ、彼の精神生活までも支配するようになつてゐた。そのような形式を強く身につけることによつて、彼は自分自身を支えてゐた。もともと才能の乏しい、精神内容の貧弱なこの父にとっては、形式だけが彼の人生の骨格の、代用品となるものであつたのだ。そして母市子は、形式というものが全く身につかない女だつた。娼樓の中で育つた彼女にとっては、形式の崩れただらしない場所こそ居心地のよい所であり、形式というものが息苦しくてたまらないのだつた。

この父と母とのちぐはぐな生き方の間にはさまれて、春江はどっち付かずにならざるを得なかつた。父に似ようとすれば母の小言をあびせられ、母に似ようと努力すれば父の叱責をうけた。彼女が親たちから不良少女と言われるようになったのは、彼女の責任ではなくて、すべて親たちの責任であつた。父は家に居るときは白い着物をきて、きちんと袴をつけてゐた。朝夕二回かならず神殿にはいつて、ひとりきりで祝詞をあげてゐた。夜になるとうやうやしく神酒を下げて来て、自分であたためて飲んでゐた。春江が学校から帰つてくると、家にはいる前になぜ神様を拝まなかつたかと言つて叱つた。長いひげを生やし、いつもしか

つめらしい顔をしていて、閑になるとお護り札の白い紙に神社の朱印を捺^{おさ}していた。

春江にとって学校へ行くことは、このちぐはぐな、愛情のかけらも無いような家庭から逃れることであった。高雄の女学校はまだ生徒の数もすくなかった。彼女は一年のときから優等生であり、殊に作文と国語とにすぐれた才能を示した。そのことから春江はますます驕慢になり、クラスの中の気むずかしい女王になっていた。かつて、大阪の叔母から、（えらい猿みたいな、小ぢやな子やな……）と言われた春江は、背丈も急に伸びて、早熟な娘になっていた。彼女はひどく先生を好ききらいし、好きな男の先生に対しては嬌態を示した。自分で意識して嬌態を見せることが、芝居をしているようで楽しかった。彼女自身は気がついて居なかったのだが、そのような身ぶり態度は、彼女が大阪の叔母の家にいたあいだに覚えて来たものだった。叔母のところへ北浜の（旦那）が訪ねて来るたびに、叔母がその男に示した嬌態を、そっくり見覚えていたのだった。彼女はやや成長して来たいま、先ず自分の教師にむかって、その覚えたことを実験してみたいのだった。それは彼女が永いあいだ夢みていた（大人の世界）にはいる第一の門であった。

彼女を教えた教師たちの意見は二種類にわかれていた。ある女の教師は春江を毛嫌^{けが}いした。

「何だか不潔な子ですね。才能はあるんですよ。でも、とても神経質で、気持のむらが多くて、あんな生徒は一番扱いにくいわ。そして、あの眼つきが嫌ですね。商売女みたいな流し眼をするでしょう。気位ばかり高くて、クラスの生徒を五六人えらんで自分の仲間をつくって、そのほかの生徒はみんな敵にしてみようような所があるわ。もう少し素直になると良いんだけど……」

この女教師の批判は春江の性格的な欠陥を全部言いあてていた。この教師は春江の生い立ちも祖父や父母の在り方も知ってはいない。ただそれらが春江の上に種々な影響をあたえて行った、その結果だけをはっきりと見定めていた。しかし男の教師のなかには全く別な見方をする人も居た。

「まあそういう点もあるかも知れませんがね。しかしあの子は才能がありますね。あんな鋭敏な生徒は僕は始めてだな。女の人は女同士で反撥する所もあるんだろが、しかし僕は純真だと思えますよ。非常に率直に自分の感情を表現するんです。だからそれが我儘に見えることもあるのだろが、僕はとても魅力のある生徒だと思うな。作文を読んでもみれば解ります。気持は大変にきれいなんだ。きれい過ぎて、かえって自分で苦しんでいるんですよ」

この先生の批評も決してまちがいでなかった。春江はそういう女だった。そういう春江の性質は終生かわらなか

った。というよりも、変えることが出来なかった。彼女を知り、彼女と何程かのつきあいを持った人たちは、必ず敵か味方かの二手にわかれた。彼女の魅力は或る種の人々には強烈にはたらきかけ、或る種の人々には反撥を感じさせた。小学生のとき、いじめっ子に毎日いじめられたように、彼女は終生、彼女をいじめる人たちから逃れることが出来なかった。しかし彼女の魅力にひかれて来る人たちも跡を絶たなかった。彼女の波瀾の多い生涯は、このようにして少女の頃から既に約束されていたのだった。……

女学校三年のときの十二月、受持の教師があわただしく春江を呼んだ。自宅から電報が来たのだった。内容はハハキトクスグ カエレというのだった。彼女はすぐに鞆を持って学校を出た。高雄の街から汽車にのって、旧城という駅で降りた。するとその駅で顔見知りの竹野という医者に会った。

「おや、どうしたね。顔色が悪いじゃないか……」と中年の肥った医者は春江の肩をつかまえるようにして言った。

「なんだ、いま時分。……学校を途中で帰って来たのか。気分が悪いんだろう」

医者は病人を見つけた時の緊張した、少しばかり得意そうな顔つきだった。春江は自分のことより母の方が心配だった。ところが竹野さんはいま母を診察しての帰りみちだった。

「電報？……母危篤？……ばかなことを言っちゃいけないよ。大げさなことを言って。……なに、何でもない。お母さんは流産だよ。去年も流産したっけがな。……それよりお前さんの方が心配だぞ。いくつだ。十六か十七か。……ふむ。危険な年頃だからな。気をつけた方がいいぞ。咳は出ないかい？」

春江は竹野さんの言葉が耳にはいらなかった。母の病気を流産と聞くと、そのいやらしさと恥ずかしさとで、死にたいような気持になっていた。彼女は男の教師にむかって嬌態を見せるような一面をもちながら、母のこういう事になると自分のからだじゅうが汚されてしまったような不快を感じる、清純な潔癖さをももっていた。母の不潔さに絶望的な思いをさせられたのは、これが二度目だった。彼女は自宅に帰って流産の直後の母を見ることの苦痛に耐えられず、一時間あまりも古い城の近所を歩きまわっていた。彼女の学校の教師が、(きれい過ぎて、かえって自分で苦しんでいるんですよ)と評した言葉の半分は当たっていた。……そんな時間に、学校鞆をもったまま、そんな場所を歩きまわっている彼女を、近所の人たちは不良少女としか見てくれなかった。

家に帰ってみると父は居なかった。母は髪を乱し、青ざめた顔をして奥の部屋に寝ていた。春江は母に呼ばれても、その部屋には行って行くことが出来なくて、唐紙の外

にびたりと坐ってしまった。

「お父さんは私のことなんか、なんにもしてくれやしないんだからね」と母は濁った声で言った。「たまにはお前だって親孝行してもいいだろう。その為に電報を打ったんだよ。どうしたの？……学校を途中で帰ってきた事が不平なの？……親が病氣だっているのにお前は知らん顔をしているつもりかい？……どうしてそんな不良になったんだらうねえ。……春江、さ、この手拭を水でしぼって来ておくれ。……返事しないの？……そこに居るんだらう。……いいわ。解ったわ。あしたから学校なんかやめておしまい。やめて、うちの手伝いをさせるからね。学校へ行ったら、だんだん不良になるばかりじゃないか。……わかったね。お父さんに退学届を出してもらうから、そのつもりでおいで。……春江。返事をおし返事を……」

春江は耐え切れなくなった。母の言葉の一つ一つが、まるでどろどろの泥水を耳の中に注ぎこまれるような氣持だった。彼女はこの母の嫌らしさに吐き氣をもよおし、両手で口を押えて台所に走った。それから足音を忍んで二階に上がり、自分の机に顔を伏せて、口をあいたまま荒い息をしていた。そして、私はこの家を出よう……と思った。この家には彼女を甘やかしてくれる人は誰もいなかった。彼女がこうした母の在り方に対して強烈な不潔さを感じ嫌悪を感じたことは、少女期の潔癖さの程度を越えて、過

剰なものがあつた。その過剰な感覚は、彼女が女というものの現実の姿を知らなかったからではなくて、少しばかりそれを知っていたからであつた。彼女は大阪の叔母さんの生活を三年にわたって凝視していたあいだに、女というものについての或る種の理想をえがき、彼女自身が持っている驕慢さも加わって、輝くばかりの幸福の幻想をえがいていた。その幸福の幻想は、理想の男性によって裏付けされたものだつた。彼女は男女関係というものをおぼろげながら知って居り、そこに幸福の夢を賭けていた。美しいシンデレラの物語のような夢であつた。そして母市子の在り方は、そのような彼女の幻想をことごとくぶち壊すような現実でもあつた。彼女が思い描いていた性関係は、花の花粉を蝶がはこんでくれるような美しいものであつたが、母子の性的肉体は血まみれ泥まみれのものだつた。それが彼女の母であり、それと同じ肉体の生理が自分にも伝えられているのかと思うと、彼女は耐え切れない氣がした。母に対する嫌悪はそのまま、女である自分自身への嫌悪でもあつた。

あくる朝、春江はまだうす暗いうちに起きて身支度をした。着がえの肌着類を風呂敷につつみ、学校鞆を持ち、そしてひそかに家をぬけ出した。家出という行為がどれだけの意味をもつたものなのか、今日から先の生活はどうなるのか、……そういう事の計算は何も出来てはいない。彼女